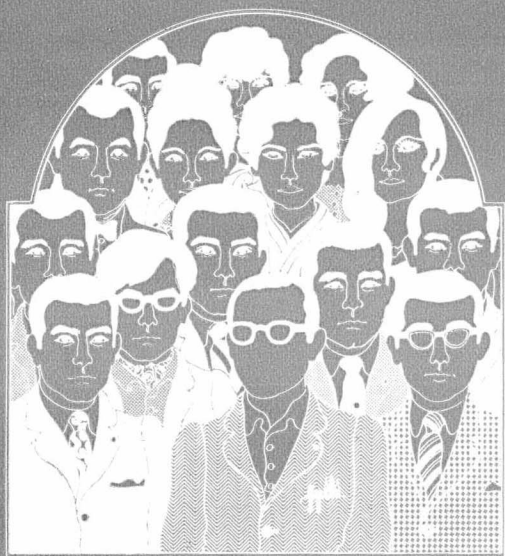


善の研究

山口 瞳



山口 瞳



文藝春秋刊

善の研究

定価 450 円

昭和43年7月5日 第1刷

著者 山口 瞳

発行者 上林 吾郎

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3

電話 東京(265)1211

印刷 凸版印刷

製本 矢嶋製本

© 1968 HITOMI YAMAGUCHI *万一落丁乱丁の際はおとりかえします
Printed in Japan

目次

あ と が き	イ タ リ ア 式	な ご 傷 ^{いた} ま じ	湿 ^ぬ れ た 肌
243	161	77	5

装
幀・
カ
ッ
ト

沢
田
重
隆

善の研究

湿^ぬれた肌

1



稲見がその酒場の前に立ったのは、もう、四回目だった。

扉のところに置いてある二箇の氷の角が丸くなっている。氷がそこにあるということは、店がまだ開いていないということだった。通りは夕暮の気配になっている。

「ちえっ。しょうがないな」

以前に受けもったことのある電機メーカーの専務が急死した。その葬式の帰りだった。

ゴールデン・ウィークのなかの日曜日である。たまたまそうなったのだろうけれど、休日の社葬というのは、何か手強いような感じがした。仕事で来られなかったとは言わせないぞ。そう言っているように思われた。社内の業務に差しつかえるようなことは致しません。そんな感じもある。戦後に急に大きくなった会社の張りつめた空気が残っている。

告別式は、二時から三時の間だった。稲見は、二時五分前ぐらいに葬儀場に着いた。思っていた通り、車が混みあっていて、焼香のために六人ずつならんだ列は折れ曲って長くのびていた。

稲見がそこを出たのは、二時半ごろである。

「新宿……」

車がはしりだしてから行先きを指定した。そこですこし休んでから帰ろうか、それとも中央線に乗ってすぐに帰るか。稲見は、まだ迷っていた。

飛び石連休の真中にあたる日曜日の盛り場は、なにか中途半端だった。休日であるという感じが、はつき

りとは擱めない。

「さて。……どうするか」

歩きながら呟^{つぶや}いてみる。

稲見のよく行く酒場で、休日に営業している店は『ホイテ』しかない。いや、新宿でも、そういう酒場はすくないだろう。ちかごろでは、銀座の酒場は、休日と休日の間のウィーク・デイも店を閉めてしまうところがふえてきた。高級をよそおっているのでもなければ商売に不熱心なせいでもない。日給制度になっている女たちの給料が高くなってきたためである。

『ホイテ』は、まだ締^ひっていた。五時に開店するとして、バーテンダーの飯田がすこし早目に三時に来ていたとしてもおかしくはない。

冬物の黒い服を着て、厚手のネクタイをしめている稲見は、焼香の列にならんでいるときから『ホイテ』へ寄って、冷房で体を冷やして、ジン・トニックを二杯ぐらい飲んで帰ろうという考えが頭の片隅にあった。通夜や葬式のあとでは、誰かに会って、故人の話をしないと気持が落ちつかない。稲見は、いつでもそう考えていた。その日も何人かの知った顔を見たが、む

こうが列の途中にいたり、徐行する車のなかであったりした。

はじめ、稲見は『ホイテ』の前を通り越して、そばにある大きなK書店のビルにはいった。そこで時間をかけて、いつかは読みたいと思っている文庫本を五冊と歌集を一冊買った。

次に、中華料理店で、生ビールを飲み、焼きソバを食べてから、場外馬券売場へむかった。中ジョッキというのが、思っていたよりはずっと大きくて、頭がふらふらするように思われた。汗がふきでてくる。

ハードイットの名は、短波放送のアナウンサーの口からは、とうとう出てこなかった。

「後位そのまま、か」

中山競馬場へ行くという『ホイテ』の経営者の福島に電話で馬券を頼んであったのである。

稲見は、もう一度、K書店ビルにひきかえし、二階の入口にある楽器店で、長男に頼まれていた『プレイ・バッハ』と、カラヤン指揮のシベリニウスの交響曲のレコードを買った。

そのうちに重賞レースの発走時刻が迫ってくる。そ

のTV中継を見たいと思った。

喫茶店で、テレビをうるさいと感ずることがあったとしても、いざ、テレビの置いてある喫茶店を探すととなると意外に困難である。あったとしても、日曜日のその時間の歌謡曲の番組などを競馬中継に変えてもらうのは、ちょっと具合がわるい。

そこで彼は、また『ホイテ』をのぞいてみることにした。

ノッカーを引っぱったがひらかない。四時五分だった。

その次が五時過ぎ。そのときには、配達された氷が置いてあった。

「どうしよう?」

まだ迷っている自分に腹が立った。

『ホイテ』の真むかいトルコ風呂のビルのホイテ室である。駐車している車と車の間に立ってみた。

いままで待ったのだから、もうすこし居てみようという気持と、こんな荷物を持っていたら五分もじっとしていられないという気持が交互した。黒服でトルコ

風呂の脇に立っているのも妙なものだ。

そのとき、頭の上に灯が点つたように思った。目をあげると『優子の店』という看板に灯がついている。それは『ホイテ』の真上だった。週に二度は『ホイテ』へ寄るくせに、廻りの店の名に注意したことはなかった。

「どうして、それに気づかなかったんだろう」

しかし『ホイテ』以外の酒場で休憩しようと考えたことはなかった。日曜日で『優子の店』だけに灯が点いていたので目立ったのだろう。稲見はちょっと救われたような気分になった。

2

「喫茶店で待っているというのも、どうも、変なもんでね」

やっと通れるような細い急な階段をあがってゆくと、そこに、うしろむきで書きものをしている女がいた。

ボックスが一組と、あとは長いカウンターで、店全体も細長い。女はいそいで紙片とノートを片づけて、

カウンターのなかへはいった。

三十六、七歳というところだろうか。一目で、水商売をながく続けている女だということがわかる。

「どうして？」

「アヴェックばかりでしょう。それに、混んでいるから合席になるんですよ。具合がわるいから、そこを出て、別の喫茶店へはいったんだ。その店も満員で、仕方ないから、若い男が一人で本を読んでいる席に坐って、失礼しますって言ったんだ」

「……………」

「そしたら、露骨に厭な顔をするのね。はあと思つたら、やっぱり、そうだった。まもなく若い女がやってきた。……こっちは恰好がつかないから、どうしても体を斜めにして坐るようになる。……だから疲れるね。つまり、もう喫茶店へ行く齡じゃなくなっているんだね」

「そんなこともないでしょう」

「水割りをください」

「あら。……いいんですのよ」

稲見は、はじめに『ホイテ』が開くまで待たしても

らいたいと言ってあった。それは、はじめの店へ一人ではいってゆく照れかくしでもあった。だから、女は、稲見の前に水を置いただけで、腰をおろしていた。

「そうもいかない」

カウンターのいちばん奥の通りに面したところに坐っていた。その窓をあけて、ときどき下を見おろすようにする。まもなく福島か飯田がやってくるだろう。女が水割りを持ってきた。

「おたくは日曜日もやっているんですか」

「いいえ。めったに店をあげることはないんですが、急に思いたって、伝票の整理に来たんです。……わたし、はじめ、びっくりしましたわ。税務署の人かと思つて」

「わるいことをしていたの」

「そうじゃないんですけれど、誰だつてびっくりしますわ。……そういうときは」

「そうだろうね。そういうもんだらうね」

「わたし、見てきましようか」

「なに？」

「下のお店」

「いや、いいよ。まだ来ていないだろう。氷が置いてあるから、やることは間違いないんだし……あんた『ホイテ』のひとつ、知ってますか」

「ええ。バーテンさんとはときどき挨拶しますわ」

「飯田ちゃんか。……飯田っていうんだけれど、とてもいいひとだ。おたくは、あんた一人？」

「いいえ。バーテンがいるんですけれど、今日は休みなんです」

「あのねえ、私、この店に来たことがあるような気がするんだけれど」

さっきから、そう思っていた。酒場の内部の造りに見覚えがあった。そう思うと『優子の店』という名にも記憶があるように思われてくる。

「そうですか」

「私の顔に見覚えはないかね。……こっちは酔っている、友達に連れられて、ちょっと寄っただけなんだけれど」

「いつ頃ですか」

「そうだね。もちろん『ホイテ』を知る以前だから、二年半ぐらい前になるかな」

「それじゃあ駄目ですわ。わたし、このお店へ来たのは今年になってからですもの」

「そうか。じゃあ、やっぱり来たことがあるんだよ」

「きれいなひとがいたでしょう」

「さあね」

「よっぽど酔ってらしたのね。あのママさんに気がつかないなんて」

「惜しいことをしたな」

「そのひとが優子さんなんですよ。わたし、前にずっと一緒のお店ではたらいっていたんです」

女は、新宿では、終戦直後から有名だったキャバレー式の高級酒場の名を言った。

「じゃあ、草わけだ。ぼくら、とてもそんな高級なところへ行かれなかった」

「わたしも本名はユウコですから、看板もマッチもそのままにしてあるんです。わたしの、木へんに由という字を書いた柚子ゆずなんです」

カウンターの上に指で書いてみせた。

「ゆずという字だね」

「そう。……わたし、ちょっと見てきますわ」

3

飯田は来ているということだった。

「マスターに電話をするって言ってましたわ」

「もう一杯ください」

あたりは夜になっていた。稲見はちょうどいい具合に酔ってきたように思った。葬式をいれて、かなり長い間、立ったり歩いたりしていたことになる。窓からの微風が快い。

「そんなに『ホイテ』っていうのはいいバーなんですか？」

「……………」

「三時間も待ったんでしょ」

「いいバーだよ。日曜日も店をあけているというのがいいじゃないか。はじめにマスターがそういう方針で店をはじめちゃったんだ。十二年前のことだけれどね。そうしたら、もう変えられないそうだ。営業していると思って客が来たら休みだったというんじゃないか、がっかりするからね」

「どういうお客さんなんでしょう。日曜日のお客さんて……。若いひとかしら」

「そうじゃないらしい。たとえば、ゴルフなんかやって、帰りに飲みに行くところがないでしょう。そういう客らしいね。……しかし、実際は日曜日に店をあけても儲からないって話だ。一人も客が来ない日があるらしいよ。それでも方針を変えないというところがいいじゃないか。店の都合で営業したり休んだりというのはおかしいね」

「あいすいません」

「元日だけ休むそうだけれど、大晦日は明け方まで飲んでる客がいるっていうから、年中無休ってわけだね。それはやっぱりいい酒場だということだね。……ところで、おたくも、さっぱりだね」

「……………」

「まるで客が来ないじゃないか」

「女の子がいらないからなんです」

「帰りにくくってしょうがないね」

「いい娘がいらないかしら」

「さあ、ね」

「女の子がいなくて駄目なんですよ。うちあたり、そんなにいい女の子が来るはずがありませんからね、若い子ならどんななんだっていいわ」
「どんな娘でもいいっていうわけにはいかないだろう」

「ころころ笑ってくれさえすればいいのよ。それだけでいいわ。頭がすこしおかしくても、器量がわるくてもいいわ。笑ってさえくれれば、だまって二千円だしてもいいと思ってるの」

「二千円というと、月収五万円か。それでも駄目？」
「だめね。このお店をはじめてから、もう、四人逃げられたわ」

「……………」

「ひどいのがいるんですよ。紹介状を持って売りこみに来るんですけれどね、前のお店に借金をはらうんだって言うから三万円貸してあげたら、一日でいなくなってしまうんですの。どういうつもりなのでしょう。可愛い顔をしていて、とってもそんなふうに見えないんですけれどね。あとでわかったんですけれど、それが十七歳で未成年なんですよ。このごろは体格がいい

からだまされてしまう」

「へええ。おかしいね」

「いろいろ探してみるんですけれど……………」

「バーっていうのは、お客さんが女の子にさわるからね。どうしても酔っぱらうと、接触欲っていうのか、さわりたがるだろう。あれがはじめての女の子なんか厭なんじゃないかな」

「そうなんです。ですから、うちでは、そっちにいてもいいし、カウンターのなかにはいつていてもいいって言うんですけど」

「……………」

「それがおもしろいんですよ。カウンターのなかに入りますでしよう。手をこうやって、カウンターのうえに置きますわね。お客さんが手を握ろうとするでしよう。そうすると、さっとひっこめるのよ。見ていておかしくてしょうがない」

「客がわるいのかね。それとも、こういうところへ勤めたら、それくらいは覚悟しないといけないのかね」
「さあ。……………もとおもしろい娘がいるんですよ。お客さんに手を握らせておいて、一分ぐらい経ったら、

あの、もうよろしいでしょうか、ですって」

「そりやおかしいね。でも、キャバレーなんかだと、もっとひどいことをされるんだろう？」

「そうなんですけれどね。でもね、キャバレーのほうがいい場合もあるんですよ。厭な客が来たらほかの席へ移れるでしょう。その点、ここは可哀相は可哀相なんです」

店も、柚子の話し方も木枯^{がれ}た趣きがある。稲見は、こういう酒場を探していたような気がしてきて、なかなか腰がさがらなかつた。空になったグラスを持ちあげて、柚子を見た。

「あのね、わたし、あなたのことをよく知っているんですよ」

水割りのグラスを持ってきて、柚子は稲見の顔を見据えるようにした。

「えっ？」

「お勤めは扶桑^{ふそう}銀行でしょう」

「どうしてわかった」

「その社章でわかりますわよ」

柚子は、稲見の胸にさわった。

「ああ、これか」

「お名前は、稲見高弘さんでしょう」

「……………」

「違います？」

「わかったよ。さっき、飯田ちゃんに聞いてきたんだろう」

「そうじゃないわ。おたくのお客さんが上で待っているって言っただけです。それでバーテンは誰だかわかったらしいんですけれどね。……わたしがわかったのは、そのワイシャツのイニシャルよ」

柚子の目が光ったように思われた。

「……………」

「ちがいます？」

「たしかに稲見だけだね」

「昭和四年生まれで、小学校は西南^{せなん}。お住まいは、武蔵野市。今日はお葬式の帰り」

「……………」

「ちょっときいてもらいたい話があるんですけれどね。……とっても面白い話」

そこへ福島があがってきた。

4

福島は柚子にむかって軽く頭をさげた。お互いに顔は知っているのだろう。それから、奥へ進んできて、稲見の隣に立った。

「まあ、坐ったらどうかね」

ストールの位置をずらせた。

「どうもすみません。……ずいぶん待ったんですって？」

「このひとつにも水割り……で、いいんだろう？」

「あ。ソーダにしてください。氷をたくさんいれて」

「……なにしろ、四回来たんだからね。馬鹿みたいだ。もっとも、一回目は三時だったけれど」

「……………」

「そのつぎが四時だったかな」

「いつもだったら、飯田は三時半には来ているんですけれどね」

「そうだろうね。そのくらいだと思っていたんだ」

「すみません」

福島はもう一度、頭をさげた。ほんとに済まなそうな顔をした。福島に落度があつたわけではないが、客を待たせたということが彼には辛かったのだろう。

稲見はそのことは言わないつもりだったのだが、ゆきがかかりで、そうなってしまった。

「まあ、いいよ。……飯田ちゃんも一緒に行つたの？」

「そうじゃないんです。なんか用事があつたんだって言つてました。今日は特別です。いつも日曜日は早くあけて、早く仕舞うんですけれど」

「……………」

「三時間も待つちやたいへんだ」

「本とレコードつてのは、案外、重いもんだね。でも、喫茶店で本を読みながら時間を潰す^{つぶ}なんて、まったく久しぶりのことだった」

「福沢諭吉著『文明論之概略』ですか。変な本を読むんですね」

福島は文庫本をばらばらとめくつた。

「変な本じゃないよ」

「うちの女の子にも本を読ませなくちゃいけないんですけれどね」

「ヒロちゃんに？」

「そう。何か読ませたいんだけど、何を読ませていいかわからない。これ、いい本ですか？」

「これはよしたほうがいいよ。……それで、どうだった？」

「……え？」

「中山だよ」

「まあまあっていうところですかね」

「そう言うからには、いくらか損をしたにちがいない。ハードイットは？」

「影も形もありませんでしたね。だいたい、稲見さんが牝馬メウマを買うのが珍らしい」

「いや、おれは転向しようかと思っているんだ、牝馬のほうに。……それに、森安っていう騎手が好きなんだ。なんだか勝ちそうな気がする」

「ぜんぜん、出てこなかった」

「おれも場外馬券売場で放送をきいていたんだ。おかしいと思っていた」

「だけど……」

福島は笑いを押さえる声になった。

「名前がおかしいですよ。凄いい色気、なんて」
柚子が近づいてきた。

「なんですって」

「ハードイットだから、凄いいアレでしょう」

「牝の悍馬ウマだ。……しかし、フクちゃん、ずいぶん学があるね」

「実を言うとね、小日向おひなたさんにきいたんですよ」

小日向は競馬記者である。

「なんだ。あいつに会ったのか」

「あとで来るって言ってましたよ」

「あ、そうだ。……これ」

稲見は、千円札を二枚、福島にわたした。

「どうも」

四つに折って胸のポケットにいれた。

「なんですの」

柚子が驚いたような顔をした。

「馬券ですよ。単勝を二枚」

「ああ。……でも、洒落た馬主シヤウさんね。ハードイットなんて名前をつけるのは」

「そうではあるけれど、どうも、女のハードイットは